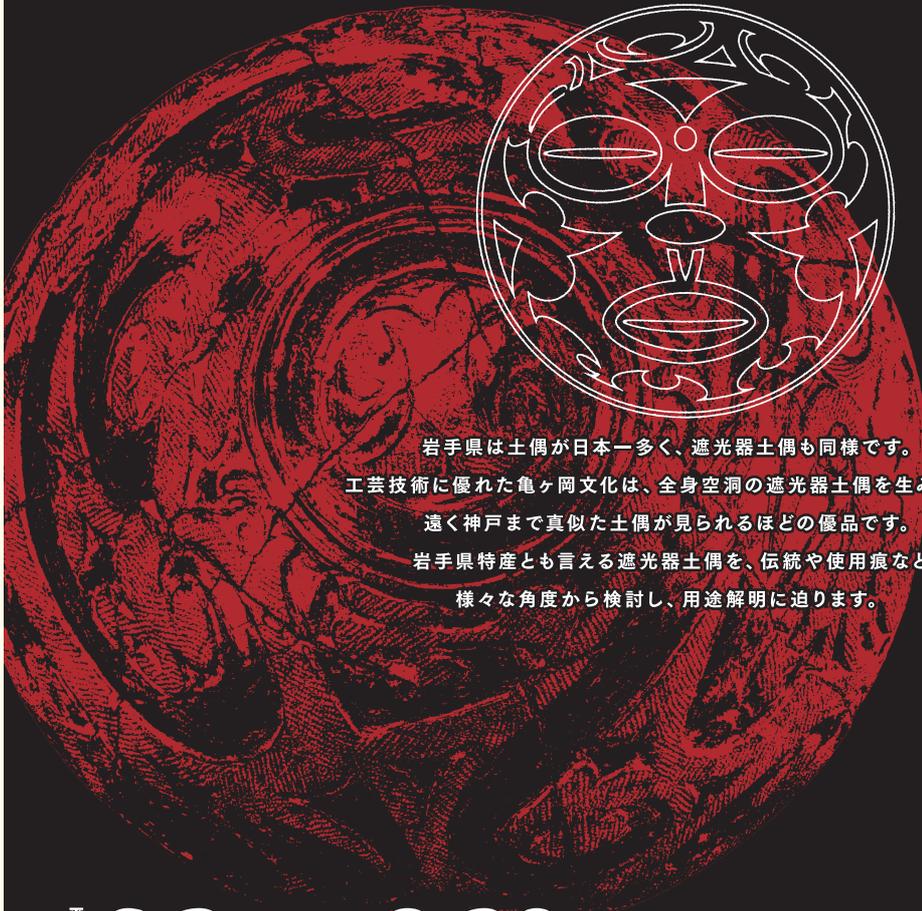


目次／第68回企画展「遮光器土偶の世界」 表紙／事業報告「教員のための博物館の日」 p.2／事業報告 ミュージウムコンサート 活動報告 平成28年度文化財等取扱講習会 p.3／展覧会案内 遮光器土偶は何に使われたのかー第68回企画展「遮光器土偶の世界」 p.4-5／いわて文化ノート 蚕と猫と馬～養蚕をめぐる動物たち～ p.6-7／インフォメーション p.8

第68回企画展 遮光器土偶の世界



岩手県は土偶が日本一多く、遮光器土偶も同様です。
工芸技術に優れた亀ヶ岡文化は、全身空洞の遮光器土偶を生み出し、
遠く神戸まで真似た土偶が見られるほどの優品です。
岩手県特産とも言える遮光器土偶を、伝統や使用痕など
様々な角度から検討し、用途解明に迫ります。

平成29年 6.3(土)～8.20(日) 岩手県立博物館

北方民族の雪メガネをかけたように見えることから名付けられた遮光器土偶は、岩手県が最も多く、日本全体の約7割が出土しています。全身空洞で薄く緻密な模様が描かれ、縄文時代の粋を尽くした究極の土偶と言えます。本企画展では、様々な角度から遮光器土偶を検討し、用途解明に迫ります。

■事業報告

「教員のための博物館の日」

開催日 平成28年8月10日(水)、12月24日(土)

本事業は、学校の先生方が博物館を楽しみながら、博物館が持つ学習資源について理解を深めることを目的とする企画です。平成20年に国立科学博物館が最初に開催し、現在は各地の博物館で同様の企画が実施されています。

当館でも「教員のための博物館の日」を開催したいと考え、各地での実施状況など、情報をおつめていました。そんな折、平成28年度の企画展が国立科学博物館とのコラボレーション企画となり、本事業についても協力していただけることとなったため、急遽、年度内に実施することが決まりました。

とはいえ、いきなり多くの先生方を集めて開催するのは不安が大きいため、第1回目は試験的に、少人数の先生方を対象として実施しました。開催中の企画展の解説会の後、バックヤードを見学し(写真1)、最後に「学校教育と博物館」をテーマとして意見交換会を行いました。実施したプログラムは大変好評で、多くの先生方に参加してほしいという意見も出され、第2回目を本格的に開催することが決定しました。



写真1 チョウチンアンコウの液浸標本を解説

第2回目の開催日は、学校が冬休みになる12月25日とし、体験できるプログラムは、各部門から合わせて6個(アンモナイトのレプリカづくり、南部北上山地の砂金、いろんなことが土器からわかる&学校近くの遺跡紹介、歴史資料の

活用・実践方法研究、「昔の道具とくらし」授業活用のための体験研修、骨からわかる生物の進化)を用意しました。これに加え、国立科学博物館の職員による、骨ホネ体験&脳容積測定体験も開催されることになり、先生方には、7個のプログラムから受講したい内容を選んで参加していただきました(写真2)。

実施当日は、小、中、高、特別支援の先生方だけでなく、教員や学芸員を目指す学生など、様々な立場の方の参加がありました。また、いくつかのプログラムは親子で参加できるように設定したところ、一組だけでしたが、お子様連れでの参加がありました。子どもたちが博物館の資料をどのようにとらえるのか、直に知ることができる利点もありますし、家族サービスも兼ねて、今後の開催でも多くの先生方に、お子様を連れて参加していただければと考えています。



写真2 砂金採り体験(上) 糞ない体験(下)

午後は、開催中のテーマ展関連の日曜講座「繰り返し訪れる津波と三陸の自然」の聴講の後、博物館利用相談会を開

いて(写真3)先生方と意見交換を行いました。多くの先生方に最後まで残っていただき、学習利用や資料貸出、出前講座等について具体的な話をすることができました。



写真3 博物館利用相談会

実施後のアンケート結果は大変好評で、今回体験できなかった他のプログラムにも参加してみたいという声が多く寄せられました。また、博物館の資料を教科学習とどのように関連付けたらよいか具体的にイメージできたという声や、地域に関する話題を授業に取り入れたいというコメントもあり、博学連携の推進に一步貢献できたのではないかと考えています。

一方、授業で使うには博物館までの移動が大変であることや、学校行事や授業日数の関係で時間の確保が難しいなどの意見が出されました。また、職場の理解が得られるか不安であるという声もありました。

今回参加された先生方は博物館との連携に大変熱心ですが、残念ながらそのような先生方は学校現場ではまだ少ないようです。児童生徒たちを博物館で学ばせたいと考える先生方がもっと多くなるよう、今後「教員のための博物館の日」を継続して開催していく予定です。

今年度も冬休み中の開催を計画しています。多くの先生方の参加をお待ちしております。

(学芸調査員 渡辺修二)

■事業報告

ミュージアムコンサート

開催日 平成28年10月2日(日)、12月24日(土)

コンサートというと、一般的にはホールなどで行う格式が高いイベントであり、親子連れで参加するには敷居が高いイメージがあります。しかし岩手県立博物館では、幼児や児童を含めて誰でも気軽に音楽を親しむことができる機会を提供することを目的として、昨年度からミュージアムコンサートを実施しました。

1回目のミュージアムコンサートは、平成28年10月2日にチェリストの吉



吉川よしひろ氏コンサートの様子

川よしひろ氏をお招きして実施しました。吉川氏は生まれつき左耳に障がいがあるというハンデを抱えつつも弦楽器の勉強を続け、22歳でプロデビューを果たして以降、数多くの演奏会を開催されてきました。コンサートでは宮沢賢治の作品でもある「星めぐりの歌」を演奏されたほか、同じように耳に障がいを持つ児童に楽器を触らせて音を聴かせるなど、聴講者との触れ合いの機会を設けていただけました。参加者はみな、素晴らしい音楽に触れて感動した様子でした。

同年12月24日に行った2回目のコンサートでは、テナーホーン、トロンボーン、ピアノで構成するトリオ(三重奏)で活動をされているトリオ・ヴィオレを迎えて演奏会を行いました。クリスマスイブということで、曲目は「きよし



クリスマスコンサートの様子

この夜」などのクリスマスソングが主体となりました。参加した子供たちは演奏とともに歌ったり踊ったりと楽しげな様子で、最高のクリスマスプレゼントとなったようでした。

岩手県立博物館では、今年度もこうした活動を続けていく予定です。多くのご来館をお待ちしております。

(学芸員 望月貴史)

■活動報告

平成28年度文化財等取扱講習会

開催日 平成29年2月1日(水)～平成29年2月3日(金)

文化財等取扱講習会は、県内市町村教育委員会の文化財担当者と岩手県博物館等連絡協議会に加盟している館園の職員を対象に毎年行っている、博物館資料の基本的取扱い、資料の収集保管、資料を活用した展示及び教育普及活動等に関する講習会です。

県予算のシーリングもあって開催が危ぶまれる面もありましたが、昨年度参加者のアンケートで「有料化してでもぜひ



研修の機会を確保してほしい」との強い要望の声が多数聞かれ、参加者に1人2千円を負担してもらうなどして何とか実施することができました。

今年度は、例年のような初級/実践(経験者)といったコース分けをやめ、初心者向けの内容として実施しました。

複数の防除方法を組み合わせることで効果的に防虫・殺虫を目指すIPMの考え方や適切な温湿度管理の方法について学ぶ資料管理。実際の古文書から調書を取る実技、文化財を借り受けるときの調書の書き方、掛け軸の掛け方・しまい方、巻物の広げ方・しまい方といった文化財の取扱の基礎。薄葉紙から紙紐を作り、紐の結びかた、梱包用の綿布団づくり、

つぼを例にを使って壊れやすい危険箇所にかかる圧力を分散させる梱包の実技。被写界深度やホワイトバランスといった撮



影時に留意すべきことについて学んだ写真撮影。大規模災害発生に備えた資料管理の取り組みについての意見交換会など、盛りだくさんで密度の濃い講習会となりました。

(学芸第二課長 小野寺俊彦)

■展覧会案内

遮光器土偶は何に使われたのかー第68回企画展「遮光器土偶の世界」

会期：平成29年6月3日（土）～平成29年8月20日（日） 会場：特別展示室

岩手県は土偶出土数が日本で（6,500点以上）、遮光器土偶も7割近くが岩手県から出土しています（表1-1）。

「土偶」は、粘土で作られた人形の意味ですが、日本で土偶と言えば、縄文時代に作られた人形を指し、古墳時代に作られた人物埴輪などは区別されます。しかし、「土偶」自体は、他の国や時代にもあるので、これらと区別し縄文時代に作られたことを強調するために、近年では「縄文土偶」と呼ばれたりもします。縄文土偶は、農耕文化の伝来とともに変容し消滅しますが、東北地方では弥生時代まで残ります。東北地方では水田耕作をしていても農耕文化ではなかったのかもしれない。

さて、当館で日ごろ展示している遮光器土偶も、老若男女問わず人気があります。そこで、今回の企画展では、遮光器土偶にスポットライトを当てて様々な角度から検討し、最大のテーマである用途解明に迫りました。

■縄文土偶のある場所

縄文土偶は、土器のように、縄文時代のいつでも、どこにでも見られるわけではありません。日本一土偶の多い岩手県

も、縄文時代前半までは、むしろ比較的小さい地域でした。

東京大学名誉教授の今村啓爾氏は、「土偶の分布について興味深いのは、九州、関東の早期、前期の東北から南下して中期の関東と中部、後期の南九州と、いずれも植物質資料を基盤とした繁栄が目立つ地域と時期にみられること」だとし、さらに「縄文の繁栄を支えたのは基本的に植物食であり、その多少が人口を変化させる最大の要因であった」と述べています。そうすると、植物資源の豊かさ（人口増）と土偶に相関性があるということになります。

なぜ繁栄する時期・地域が変化するかといえば、気温（気候）が変化するからで、その植物にふさわしい気温の地域が時期によって変わるからでしょう。縄文時代の始まりは寒く、その後、前半は今より暖かく、終わり頃は大体今と同じでした。

土偶の量が植物の採集加工に使う石器の量と比例するという現象は、日本一土偶の多い青森県三内丸山遺跡でも、二番目に多い山梨県釈迦堂遺跡でも確認されています。遮光器土偶の出土も、内陸に

光器土偶も、立体的なのは頭だけで、背中はやはり平らです（写真1-2）。こうなると、やはり平らなものには理由があると思わざるを得ません。

まず思い浮かぶのは、壁に据え付けることです。縄文土偶には、頭、腕の付け



写真1 岩手県岩手町豊岡遺跡の遮光器土偶

表1-1 東北地方の遮光器系列土偶

	大遮	大遮?	大遮系統 大逆出?	大遮系統? 大逆出?	小遮	小遮?	小遮系統	小遮系統?	県別合計
青森県	81	45	32	30	61	66	12	9	336
岩手県	174	144	235	241	221	97	4	22	1,138
秋田県	60	41	35	22	42	24	0	10	234
宮城県	8	1	23	16	9	2	0	6	65
山形県	0	0	21	10	0	2	0	0	33
福島県	0	0	3	3	0	0	0	0	6
計	323	231	349	322	333	191	16	47	
合計1		554		671		524		63	
合計2				1,225				587	
総計								1,812	

表1-2 岩手県の遮光器系列土偶

	大遮	大遮?	大遮系統 大逆出?	大遮系統? 大逆出?	小遮	小遮?	小遮系統	小遮系統?	地域別合計
奥羽山脈	2	2	0	0	5	1	0	0	10
沿岸	28	13	14	17	4	2	0	1	79
その他	144	129	221	224	212	94	4	21	1,049
計	174	144	235	241	221	97	4	22	
合計1		318		476		318		26	
合計2				794				344	
総計								1,138	

偏り、険しい奥羽山系や沿岸部に少ないことから（表1-2）、やはり植物質食料との関連が窺われます。

■縄文土偶は平らで、立てない

ところで、縄文土偶の大きな特徴は、大きな介添えなしに立たせることができない点です。基本的に板状に作られていて背面が平らなためです。大型の遮

根、胸に一对の貫通孔^{かんつうこう}を持つものがあり(写真2)、こうした用途にふさわしいです。立てたり吊り下げたりするのに使ったという研究者もいますが、大きな荷重^{かしじゅう}に耐えられるような大きさの穴ではなく、何より、立てるのなら、縄文人の技術力ならば最初から立つように作るのではないかと思います。そして、立てるのなら背面が平らである必要はありません。

■大型遮光器土偶の後頭部の摩滅痕^{まめつこん}

壁に据え付けるのも、大型遮光器土偶の場合はふさわしくありません。後頭部が著しく出っ張っているからです。そして、良く観察してみると、大型遮光器土偶の突出した後頭部には、しばしばひどい摩滅痕^{まめつこん}が見られます(写真1-3)。コンクリートで擦ったような摩滅痕は、何かに据え付けて激しく動かされたことによって生じたと推測され、縄文人の行動様式で理解すれば、“何かに固定して持ち歩いた”用途が浮かびます。

■土偶の用途を考える

確かに、土偶は「植物質資料を基盤とした繁栄が目立つ地域と時期にみられる」ようです。植物資源の豊かさを繁栄につなげるには、それを採集・加工することが不可欠で、それを担^{にな}うのは、定説



写真2 岩手県紫波町西田遺跡の土偶

では女性です。そうすると、美味な“肉の獲得”に対する要求は変わらず、男性には狩猟活動が求められ続けたと思われる。おそらく“女子ども”だけで、それまでより長く集落から離れて森の中に入って活動しなければならなくなり、危険な目に合う機会も増したことでしょう。そのため、女性の中にお守りを必要とする者が現れ、それが土偶の出現だと推測します。初期の土偶が立体的なのは、小さいので携帯に支障がなかったためであり、大型化するにつれ運搬^{うんぱん}するための工夫(板状、据え付け)が必要になったということではないでしょうか。

■壊れても捨てられない^{こわ}

とは言っても、土偶は掌^{てのひら}に収まる大きさが主流です。手に持って扱い、持ち歩くなれば、壊れる機会は非常に多くなります。しかし、持ち歩くなれば愛着が強く湧き、壊れても、簡単には捨てられないし、用途に関わるわけでもないのですぐには取り替える必要もありません。逆に、気に入らなくて愛着が生まれなければ壊れていなくても取り替えることもあるでしょう。こうして想定される残存状況は、実態に合っていると思います。

■多様な土偶の理由

なぜ土偶は携帯に不便なほど大型化したのでしょうか。それは、小さいと森の中でなくしやすく、またその効き目に対する期待の大きさの表れと考えます。

大型化するといっても多くの土偶は300g未満で、ペットボトルより軽く、500gあっても出現期のiPadより軽いのです。さすがに、大型遮光器土偶は1kg以上あり片手で持つのは無理ですが、赤ん坊を抱くように両手で持てば十分軽く、大型遮光器土偶が空洞化するの軽量化のためであった可能性もあります。大型遮光器土偶だけ別の用途だった可能

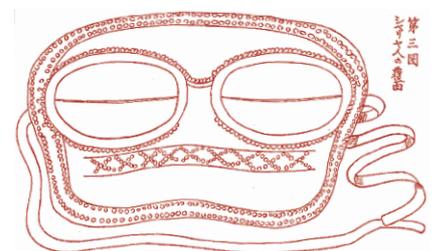
性も十分にありますが、形や発見される場所など多くの特徴が縄文土偶の伝統そのままなので、別だとするのは不自然です。

さらに、出産土偶やおんぶ、抱っこをする土偶が現れるのは、携帯し続ける中で愛着が生まれ、森の中でのお守りから、安産祈願など個人の守護神にまで用途が広がっていったためと考えられます。これらを本来の土偶と全く別物とするのは、かなりの程度デザインを共有しているので無理があります。ポーズを取らない土偶が主流であり続けるのは、幼児の“お人形さん”と同じで、特化したポーズを採らない方がその時々でいろいろな役割を見立てられるからではないでしょうか。

■女性が所有する女性像

土偶の所有者が女性であることは、出土場所からも示唆^{しさ}されます。基本的には集落の範囲内あるいはそれに近い活動の範囲内から出土します。生態人類学者、渡辺仁氏は、これを近位ゾーンと呼び、主として女性と子供の活動領域としました。遠位ゾーンは男性の活動領域で、例えば八幡平^{はちまんたい}のような高い山の上からは、土器片や矢じり、石棒の仲間出土しても、土偶は発見されません。さらに、土偶は、家の中や集落の中だけでなく、その周辺からも出土していることから、近位ゾーンでの活動に伴った可能性があり、土偶を持ち歩く証拠とみなせるかもしれせん。

(主任専門学芸員・金子昭彦)



■いわて文化ノート

蚕と猫と馬～養蚕をめぐる動物たち～

専門学芸員 近藤 良子（民俗部門）

昨年秋、当館総合展示室で「絵馬に描かれた猫」という小さなトピック展を開きました。また、いわて文化史展示室では養蚕業を紹介し、県内の養蚕信仰にまつわる展示において猫の絵馬を展示しております。この展示は、陸前高田市の猫淵神社より猫絵馬をご寄贈いただいたことがきっかけでした。蚕と猫には一体どんな関係性があるのでしょうか？



写真1 奉納された猫絵馬（S.23銘）／館蔵

■猫絵馬の奉納と養蚕業

かつて岩手県でも養蚕が盛だった頃、県南地方を中心に養蚕祈願のため、猫の絵馬を描いて神社に奉納する習俗がありました。この習俗は、岩手県南から福島県の養蚕地域に見られるもので、大事な商品となる繭を食い荒らすネズミを駆除するため、家で飼われていた猫に願を掛け、絵馬に描いたといえます。

日本最古の養蚕専門書である野本道玄の『蚕飼養法記』[江戸中期]には、「家々に必ず能くよく猫を飼置べし」との記述があり、養蚕農家のネズミ対策として猫を飼うことが良いと強調されています。

県内で猫絵馬が見つかっているのは、住田町の猫淵神社、陸前高田市矢作町の猫淵神社など、かつて養蚕が盛んにおこなわれていた地域と一致します。県内でも明治中頃から戦前にかけて盛んに行われた養蚕は、農家が現金収入を得るための一つの投機であり、常に期待や不安がともなうものでした。「運の虫」とも言われた蚕の飼育は、天候に左右され、まさに神頼みのところもありました。その

ため豊蚕への願いは、全国的に時代や地域により様々な展開を見せてきました。

■蚕と馬

オシラサマ



写真2 オシラサマ（貫頭衣型）／館蔵

ここで養蚕と馬の関係について見てみたいと思います。蚕の神というとオシラサマが思い浮かびます。オシラサマは、約30cmほどの桑の木などの先に、男女や馬の顔などを墨書したり彫ったりしたもので、養蚕の神や目の神、家の神、農神ともいわれます。写真2は、頭が衣から出ているタイプの貫頭衣型のオシラサマで、桑の木に馬の顔や人の顔が彫られています。この資料はかつて陸前高田市気仙町の個人宅で養蚕の神として祀られていたものです。

『遠野物語』69話には、オシラサマの起源ともいべき馬娘婚姻譚が記されています。娘と夫婦となった馬を父親が殺し、娘は切られた馬の首に乗って天に昇ってしまいます。「オシラサマと云うはこの時より成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の枝にてその神の像をつくる」といいます。オシラサマは蚕の神ともされますが、このことについて現地調査を踏まえた報告書（『いわてオシラサマ探訪』（岩手県立博物館編／2008／岩手県立博物館調査研究報告書第23冊））があります。オシラサマは包頭衣型と貫頭型の2つのタイプに大別され、その形態から蚕の神か目の神かを調査しています。地方によって、目の神であったり蚕の神であったりまちまちですが、報

告では「県北地方は「包>貫」で「目>蚕」の傾向が強く、これに対して県南地方では「包<貫」で「目<蚕」という傾向だが、複雑で割り切れない部分もかなり見られる」としています。

各地に残る養蚕信仰はオシラサマ一つをとっても様々な信仰や伝説と結びつき、多様かつ複雑な様相を呈しています。

馬は家畜として重要な存在で、曲がり屋で一つ屋根の下に人間と馬が暮らしたように大切に育てられてきました。蚕もまた、人間が飼いならした虫で、家畜のように一頭、二頭と数え大事に育てたそうです。蚕の背の模様は半月紋と呼ばれますが、見ようによっては馬の蹄にも見えるので馬蹄紋と呼ぶこともあります。蚕は脱皮を4回繰り返して繭を作り始める頃になると、胴体上部を持ち上げて静止し、糸を吐く準備を始めます。この時の様子が馬の姿形に似ていることから、身近な存在である馬が蚕と結びついたのであるとも言われています。



写真3 一関市弥栄地区養蚕農家にて撮影 H28

■蚕と猫

猫の絵馬

今回猫絵馬をご寄贈いただいた陸前高田市の猫淵神社には、比較的絵柄や墨書が見えやすい絵馬が459枚残されていました。確認できた最も古い猫絵馬は、明治11（1878）年のものでした。奉納年が読み取れるもので、明治が23枚、大正が25枚、昭和が48枚、平成が7枚あり、昭和初期から40年代のものでした。墨書で猫の絵や「猫」、「猫佛」という文字を書いたもので、猫がネズミ

を捕える絵や、猫の健康祈願、死んでしまった猫を弔う内容の絵馬も見られます。また、同じネズミの天敵という意味から蛇の絵を描いた絵馬もありました。さらに、「猫淵不動明王守護」と書かれた版木、祠の中には木彫りの猫の像も3体奉納されています。

ご寄贈いただいた絵馬を見ながら、奉納された頃の県南地域や、岩手県の養蚕業の歴史を見てみましょう。

明治政府は養蚕を国家産業として重視し、県でも養蚕業振興のため、桑苗栽培や人材の育成に力を入れました。



写真4 後向きの黒猫 (T.5銘) / 館蔵

この絵馬が奉納された大正期、県では「原蚕種製造所」(後の「蚕業試験場」)が設置され、生糸市場が活発化、生糸価格が高騰し、養蚕業が活気づきます。気仙地方には、明治から昭和初期にかけて多くの機械製糸工場が設立されています。



写真5 赤い首綱をした猫 (S.18銘) / 館蔵

昭和14(1939)年に第二次世界大戦が勃発すると、戦時下の食糧増産のため桑園面積、養蚕戸数、収繭量が激減し、米国との関係悪化で生糸の対米輸出が途絶え、製糸業界は大打撃を受けます。生糸の大部分は国内消費に回され、質より量の生産に重点が置かれるように

なりました。さらに昭和16(1941)年に太平洋戦争が始まると、あらゆるものが軍事優先となるなかで、絹は落下傘や軍服の原料として「繭も兵器なり」と言われしめるほどに養蚕業も戦争の波にのまれていったのです。

戦後、生糸の内需拡大とともに養蚕業は徐々に回復したものの、化学繊維の台頭や海外の安い生糸の流入による生糸価格の低迷、養蚕従事者の高齢化などで養蚕農家も減少していきました。



写真6 白猫 (S.61銘) / 館蔵

これは昭和の奉納年銘が見える絵馬です。昭和60年代から平成にかけてこの地区での養蚕農家は10戸を下回っているため、この頃の猫絵馬の奉納は豊蚕祈願という意味合いよりも飼育猫の健康祈願等が中心となっていったと考えられます。

養蚕農家の減少とともに、豊蚕を願う猫絵馬奉納の風習も失われていきました。現在、岩手県で養蚕を行っている農家は、18戸(H26「岩手県蚕糸統計」)のみとなっています。(参考文献『陸前高田市史』第9巻産業編/陸前高田市史編纂委員会1997年)

■森口多里『民俗の四季』にも紹介

さて、民俗学者の森口多里の『民俗の四季』(1980年)にもこの猫淵神社が「ねこぶちさま」として紹介されています。「小さな堂内には猫を思い思いの形にえがいた絵馬が乱雑に積まれ、幾枚かは正面の柱にも打ち付けられている。(略)1枚だけ三毛猫の親子三匹を描い

たものは墨と薄墨のほかには胡粉の白を用い、鈴には黄色にいろどり、ちょっとクロウトくさい絵で、昭和14年旧3月吉日(奉納者名略)とするされている。」とあり、今回ご寄贈いただいた絵馬(写真8)がこれにあたります。猫絵馬奉納については、猫の育たない家が猫淵様に参拝して堂内の絵馬1枚を借りて帰り、猫が育ったならお礼参りをし、新しい絵馬1枚を添えて返したそうで、猫絵馬の奉納枚数が多くなっている理由には、このような「倍返し」の風習があったからとも考えられます。



写真7 森口多里coll. (S.37撮影)



写真8 三毛猫の親子 (S.14銘) / 館蔵

今回、猫絵馬をご寄贈いただきました猫淵神社別当梅木力氏には、大変お世話になりました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

奉納絵馬を調査していくと、奉納者が猫を単に養蚕の神として祀るだけでなく日頃の愛嬌ある猫の姿を描いたり、死んだ猫の弔いなど様々な思いが垣間見えてきました。今回は蚕と猫と馬の関係性を見てみました。過酷な自然環境に暮らす中、人々が様々な動物の特性に霊力を見出し祈りを捧げてきたことが分かります。



岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション 〈2017.6.1~2017.9.30〉

お知らせ

●夏の臨時開館

平成29年7月31日(月)、8月7日(月)、8月14日(月)は臨時開館します。平成29年7月25日(火)~8月20日(日)は無休、翌8月21日(月)は休館です。

●資料整理に伴う休館

平成29年9月1日(金)~平成29年9月10日(日)は資料整理のため休館します。

●敬老の日65歳以上入館無料

平成29年9月18日(月・敬老の日)は、65歳以上の方は無料で入館できます。

展覧会

●第68回企画展「遮光器土偶の世界」

平成29年6月3日(土)~平成29年8月20日(日) 2階 特別展示室

独特の風貌の遮光器土偶の実態を、最先端の研究によって明らかにし、土偶の使いみちの解明に迫ります。

※詳細はp.4-5 展覧会案内記事をご覧ください。

◆土偶シンポジウム「土偶は壊す？壊さない？」

7月16日(日) 13:30~15:30 講堂 当日受付・聴講無料

基調講演：小野美代子 氏(元(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団)

土偶は壊すものと言われてきましたが、果たして本当でしょうか。土偶の使いみちについて最新の研究成果を紹介します。

◆展示解説会(中学生~一般向け) 14:30~15:30 大人は要入館料

6月10日(土)、7月30日(日)、8月6日(日)

◆子ども展示解説会(小学生対象) 10:30~11:30 高校生以下無料

8月1日(火)、8月11日(金・山の日)

◆県博日曜講座「遮光器土偶の使い方」 講堂 当日受付 聴講無料

平成29年6月25日(日) 13:30~15:30 金子昭彦(当館学芸員)

※下記「県博日曜講座」の欄もご覧ください。

●テーマ展「中世の南部氏と糠部」

平成29年9月23日(土)~平成29年11月26日(日) 2階 特別展示室

※詳細は次号で紹介いたします。

県博日曜講座

第2・第4日曜日 13:30~15:00 当日受付 聴講無料

当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。

* 展覧会関連講座

6月11日「祈りに見る動物たち」 近藤良子(当館学芸員)

* 6月25日「遮光器土偶の使い方」 金子昭彦(当館学芸員)

* 7月 9日「雨滝遺跡と雨滝論争」 丸山浩治(当館学芸員)

* 7月23日「盛岡川目A遺跡・600点の土偶」

高木 晃 氏((公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)

8月13日「考古資料から見た塩づくり」 濱田 宏(当館学芸課長)

8月27日「岩手の植物相はどこまで分かったか」 鈴木まほろ(当館学芸員)

9月24日「岩手の災害と歴史」 小田桐睦弥 氏(花巻市博物館学芸員)

観察会・見学会(事前申込制)

第73回地質観察会「白亜紀の地層を読む」

平成29年7月2日(日) 10:00~15:00

於、野田村・久慈市 現地集合・解散

野田村~久慈市周辺に広がる白亜紀の地層を観察し、地層ができた環境やそこにいた生物の生活を読み解きます。

講師：望月貴史(当館学芸員)

定員：20名(小学校高学年以上、要保護者承諾)

参加費：大人1,600円、中学生以下1,100円(傷害保険料、施設利用料)

募集期間：6月1日(木)~6月10日(土) 定員充足しだい締切

第73回自然観察会「夏の自然観察会・鞍掛山山麓」

平成29年7月29日(土) 10:00~15:00

於、滝沢市相の沢キャンプ場 現地集合・解散

岩手山を見上げる鞍掛山のふもとで、森や草原の昆虫を追いかけよう!

講師：千葉武勝 氏(当館研究協力員)ほか

定員：20名(小学生以上、要保護者承諾)

参加費：100円(傷害保険料)

募集期間：7月1日(土)~7月16日(日) 定員充足しだい締切

第74回自然観察会「稲庭岳~秋の山を楽しむ~」

平成29年9月23日(土・秋分の日) 8:30~17:30

於、二戸市浄法寺町稲庭岳

ゆるやかな稲庭岳の登山道を登りながら、秋の自然を満喫しましょう。

※友の会会員限定

講師：千葉武勝 氏(当館研究協力員)ほか

定員：20名(小学生以上の友の会会員とその御家族)

参加費：実費負担(バス代・3,000円程度)

募集期間：8月1日(火)~8月31日(木) 定員充足しだい締切

観察会の申込み方法：往復はがきまたは電子メールで受け付けます。詳細はお問い合わせください。

ナイトミュージアム~くらやみの中から語りかける資料をさぐる~

平成29年8月10日(木)・11日(金) 17:30~18:30

ふだんは見られない、閉館後の展示室を学芸員といっしょに歩いて新しい発見をしてみませんか?

定員：24名(小学生~中学生とその保護者) 懐中電灯を各自で準備

※要事前申し込み(先着順・定員充足しだい締切)要入館料

募集期間：7月18日(火)~7月23日(日)

申込方法：9:30~16:30の開館時に来館、または電話にて。

※18日(火)は電話でのみ受付

週末の催し

◆ミュージアムシアター ※9月はお休みします。

毎月第1土曜日 13:30~15:00頃 講堂 当日受付 視聴無料

6月3日 「奥様は魔女」(77分/一般向け/モノクロ実写 1942年の米国映画)

日米で大ヒットした人気テレビシリーズ「奥さまは魔女」の原点となった作品

7月1日 夏休み直前アニメスペシャル「カッパの三平」(90分/小学生~一般)

水底の世界へ迷い込んだ三平は、カッパに捕まってしまいますが……

8月5日 夏休み映画「小さな世界はワンダーランド」(98分/小学生~一般)

BBC earthが放つ、脅威と感動の生き物たちのドラマ!

◆チャレンジ!はくぶつかん

毎月第2・第3土曜、日曜、祝日 小学生向け 随時受付

チャレンジ!マークをさがしてはくぶつかんをたんけん!

6月10日・11日・17日・18日 テーマ：光

7月 8日・9日・15日・16日・17日 テーマ：土

8月12日・13日・14日・19日・20日 テーマ：陸

9月16日・17日・18日・23日・24日 テーマ：長い

◆たいけん教室~みんなのためそう~(事前申込制)

毎週日曜日 13:00~14:30 幼児(保護者同伴)・小学生20名程度

さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。

※4月から全プログラム有料となりました(材料費/プログラムごとに異なります)。

※要事前申込み。開催日の1週間前の日曜日から電話または博物館で開館時間(9:30~16:30、休館日を除く)に先着順に受け付けます。1度に3名まで予約可能です。予約状況・材料費代はホームページでご確認ください。

6月	4日	チャグチャグ馬コづくり	8月	6日*	こはくの玉づくり
	11日	草花のそめもの		13日	天然石のフォトフレーム
	18日	石から絵の具を作ろう		20日	土器づくり
7月	25日	土偶づくり	9月	27日	アンモナイトの消しゴムづくり
	2日	3Dメガネで万華鏡		3日	お休み
	9日	化石のレプリカ		10日	お休み
	16日	砂絵		17日	まが玉アクセサリ
	23日*	スライムであそぼう		24日	手づくり万華鏡
	30日*	ちぎり絵のうちわ			

*7月23日、7月30日、8月6日は午前[10:00~11:30]と午後[13:00~14:30]の2回あります。

定時解説

平日~土曜日 13:30~14:30/日曜日 10:30~11:30

解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員が皆様のご質問や解説のご希望におこたえしています。

※他の館内イベントとの兼ね合いでお休みする場合があります。

※夏休み期間中(7月25日~8月27日) ※ただし7月30日と8月6日をのぞくは「子ども向け定時解説」を行います。

平成29年度の利用案内

■開館時間 9:30~16:30(入館は16:00まで)

■休館日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)

※7月31日(月)、8月7日(月)、8月14日(月)、

10月9日(月)は臨時開館

資料整理日(9月1日~9月10日)

年末年始(12月29日~1月3日)

■入館料 一般310(140)円・学生140(70)円・高校生以下無料

()内は20名以上の団体割引料金

※11月3日(金・文化の日)は無料

※9月18日(月・敬老の日)は65歳以上の方無料

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率等は、申請により入館料免除となります。

※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第153号 平成29年6月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831/Fax. (019)665-1214 発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235/Fax. (019)625-3595
------------------------------------	---